Saint Maybe における社会性

徳　永　紀美子

序論

Anne Tyler は、これまでに15冊の長編と文芸誌や *New Yorker* を始めとするいわゆる高級雑誌に数多くの短編を発表してきた。それらの作品は、高い評価を受け、[1] しかも文学作品としては異例の好調な売り上げを記録している。その一方で、彼女の作風に関しては「政治性や社会性の欠如」がしばしば指摘されている。

実際、彼女が描く世界は、階級的に見れば、アッパー・ミドル・クラスを除く、ごく平均的な中産階級の人々であり、中心的に扱う人種は白人、舞台も初期の３作をのぞけば、すべてボルティモアに限定されている。どの作品においても中心となるテーマは、家族というひとつの人間集団が生み出すダイナミックスである。言い換えれば、1950年代以来、多くの作家が取り上げてきた郊外族の中産階級白人をモデルにした家庭小説である。

Edward Albee、John Cheever、John Updike なども同様のジャンルで作品を書いているが、彼らが中産階級の白人家庭の虚実や欺瞞を暴き出すのに対し、Tyler は個人の生き方に焦点を合わせ、登場人物の精神的な問題にひたすら目を向けているように見える。そのためそこでは確かに、政治や歴史、現代社会といったものが孕む種々の問題が前面に押し出されることはない。

しかし、政治性や社会性の希薄さは、基本的には作家としての Tyler の関心事とスタイルに起因し、その意味ではむしろ当然の結果ともいえるだろう。彼女は、折あるごとに、作家としての自分の関心はキャラクターにあるということを強調している。そして長い時の流れの中で家庭を舞台にキャラクターを捉えるのが、彼女の手法だからである。

しかしながら、それでもなお作品を詳細に読んでいくと、Tyler の関心事に沿った形で社会的な側面もまた作品中に書き込まれていることに気がつくのである。しかも、その中には結果的に、現代アメリカ社会の価値観に対するアンチテーゼとなりうるものや、そこまでいかずともオルターナティブな価値観となりうるものが存在している。

本稿では、ともすれば見落とされがちなTylerの社会的側面への視線を*Saint Maybe*(1991)[2]を通じて追ってみる。Tylerが家族や家庭を描く時、そこに現代社会はどのように投影されているのか、既成の価値観はどう試されているのか、また、そこでは彼女の作家としての特質がどのように反映されているのかを考察したい。

1 "patchwork family"：新しくて古い家族像

Tylerの12作目にあたる*Saint Maybe*は、1965年から1989年までのアメリカを社会背景とした一家族の年代記である。そこでは、家族のメンバー全員に何らかの光が当てられ、彼らや家庭そのものが変化していく様が描かれている。その中で特に大きな比重を与えられているのが、物語の中心人物であるIan Bedloeの善の希求とそれに伴う精神的変化、特に他者との関り方における変化である。

家族の力学は、メンバーの年齢的な変化やさまざまな出来事に影響されながら変化して行く。Ianの両親であるDougとBeeが家庭生活の中心的担い手であった時点から物語は始まり、その中心はやがて次男のIanへと移り、最後には更に新しい世代の誕生を迎えて終結する。家庭は、その内と外からの両方の力により変化を被っている。家族の死と新しい命の誕生という生命のサイクル、家族の伝統の継承と刷新、崩壊したかに見えた家庭の新生、そういった家族と家庭のダイナミックスが日常生活を通してつぶさに描かれている。以下、Bedloe家の変遷を辿ることによってどのような家族観が提示されているかを見てみる。

IanのDougとBeeはともに50年代的な中産階級の価値観を持っており、特に母親が「理想的家族の神話」[3]を維持する役割を担っている。しかし、Bedloe家の「理想的アメリカン・ファミリー」("the ideal, apple-pie household")（5）という神話も長男DannyがLucyと結婚することにより翳り始める。彼女は一家にとってはいわば「外部からの介入者」であり、社会的階層も一家よりは少し低いところにある。彼女には前回の結婚により養育中の子供が二人いたうえに、Dannyとの結婚直後ということになっている妊娠も実はDannyと知り合う前に起こっていたということがほのめかされる。ほとんど自殺とも思われるDannyの自動車事故死とそれに続く睡眠薬過剰摂取によるLucyの死によって、一家は血縁関係のない子供を3人抱え込むことになる。引き取り手のない子供たちと歳をとっていく両親のために、Ianは悩んだ末、19歳で大学を辞めて一家を支えることにする。

彼らのかつてのアメリカ的楽天性は影を潜め、一家の精神的支柱であったBeeをして「私たちは、もう前みたいに飛切りの家族じゃなくなったのよ」("We're not a special family anymore.") (181)、あるいは「私たち、自信を失くしてしまったのね。心配ばかりするようになったんだわ」("We've turned uncertain. We've turned into worriers.") (181) と言わしめている。彼女は、長男の死を契機とした家族の様変わりを「転落」と見なして嘆く。

> "And yet so much has changed. Danny is gone, our golden boy, our first baby boy that we were so proud of, and our house is stuffed with someone else's children. You know they *all* are someone else's.... And Ian is a whole different person...and our lives have turned so makeshift and second-class, so second-string, so second-fiddle, and everything's been lost...and our life's in ruins!" (181)

これはBeeが拠って立っていた50年代的家族神話の崩壊を意味し、その基盤がいかに脆いものであるかを示している。

しかし、Tylerの意図は、家庭崩壊を描くことでもアメリカの理想の家庭像にBedloe家の実像を照らし合わせることでもなかった。彼女はIanを通して、血縁によらない別の家族のあり方も有効であることを示そうとしたのだ。つまり、"biological family" ではなく "surrogate family" とか "step family"、"extended family" あるいは "blended family" と呼ばれる現代のアメリカではむしろ「主流」となった様々な家族形態[4] にTylerは光を当てている。現在のアメリカでは、すべての結婚のほぼ半数のカップルが離婚に終わり、更に再婚、場合によっては再婚・離婚を繰り返すことによって新たな家族を形成することは珍しくない。[5]そのような現状において、伝統的家族像（郊外に庭付きの家を構え、異性愛で結ばれた両親が揃っていて、父親を一家の唯一の稼ぎ手とし、母親が専業主婦で子供がいる核家族）だけを理想の家族像とすることは、50年代以降使われてきた保守的な政治的レトリックのひとつにすぎないのである。

Bedloe家の家庭生活の中心をBeeからIanへと移すことは、従来変則的だとされていた家族形態が家庭として成り立っていくかどうかを査証する試みでもある。本作品の執筆・出版の時期が、「伝統的家族への回帰」をその政治的スローガンのひとつとして掲げた、10年に渡るレーガン政権の終焉とほぼ時を同じくしていることは、興味深い。なぜならIanの家族形成とそこで

の彼の働きは、現状を無視した反動的な80年代レーガン政権への静かな抵抗とも映るからである。

因習に囚われない Tyler の家族観は、第５章で挿入された地球外生命体による地球人に関する実験エピソードに隠されている。ある時、３人の子供のうち Daphne と Thomas が水疱瘡にかかり、夜中も看病している Ian の声を Doug は耳にする。その時 Doug は、ある短編小説のことをふと思い出す。その小説は、地球外生命体が地球人は血のつながりがなくても絆を結べるのかどうかを知るために実験を行うという筋書きのサイエンス・フィクションである。

> What the creature wanted to know was, could earthlings form emotional attachments? Or were they merely at the mercy of biology? So they cut the house in half in the middle of the night, and they switched it with another half house in some totally different location. Tossed the two households together like so many game pieces. This woman woke up with a man and some children she'd never laid eyes on before. Naturally she was terribly puzzled and upset, and the others were too, but as it happened the children had some kind of illness, measles or something...and so of course she did everything she could to make them comfortable. The creatures' conclusion, therefore, was that earthlings didn't discriminate. Their family feelings, so called, were a matter of blind circumstance. (172)

ここに表されるように、家族を家族足らしめる感情は、状況次第で、生物学的絆を超えて形成されうるものだとするのが、Tyler の見方である。つまり、人間が責任感、忍耐、善意や愛情といったものを発揮できる限り、家族は血のつながりにかかわりなく成立するのである。

子供たちがまだ幼かった頃、彼らから見た Ian は「どっしりと頼りがいがある大切な人」("solid and reliable and dear") (243) で、彼らの世界の中心だった。Ian にとっても彼らは「自分の子供同然」("they're really like my own") (188) で、実際のところ「子供たちはイアンの生活に彩りとエネルギーと・・・人生そのものを与えた」("They were all that gave his life color, and energy, and...life.") (216) のである。こうして Tyler は、家族の形態よりもその枠の中で培われる関係の質を問うているのだ。

しかし、その一方で彼女は、Ian が中心となって Bee や Doug と共に他人の子供たちを育てたことを滅私の美談として提示しているわけではない。Ian は、大きな不安を抱えながらも両親の反対を押し切り、自分の将来の可能性を捨ててまで子育てを第一義とした。しかし、彼にそれだけの覚悟があってもなお、子育ての大変さがもたらす焦燥感や倦怠感と幾度となく戦わなければならなかった。

> "I had both my parents helping, and still it wasn't easy. A lot of it was just plain boring. Just providing a warm body, just being there; anyone could have done it. And then other parts were terrifying. Kids get into so much! They start to matter so much. Some days I felt like a fireman or lifeguard or something — all that tedium, broken up by little spurts of high drama." (312)

日々の営みから生まれる感慨をこのように書き込むことによって、家庭を築いていく上での Ian の生活に大きな現実感が付与されている。また、血を分けた子供であろうとなかろうと、育児は骨の折れる仕事であるが、それがあるからこそ深い絆が家族の間に生まれるという子育ての両面が提示されている。その結果、育児における Ian の自己犠牲的側面よりも、子育てをする悲喜こもごもの具体的な姿のほうが前面に押し出されて「どこの家庭生活も似たり寄ったり」なのだという印象の方がより強く残る。そのことは取りも直さず、作者が意図した「普遍的な家族の姿」を提示するという目的の一部なのである。

その目的のために Tyler は、更に家族関係の複雑な感情を盛り込み、うまく機能している家族でさえも家族や家庭生活に対して相反する二つの気持ちを持つことを描いている。つまり、人間は、家族に対して愛情を注ぎ相互に依存しあう反面、時として家庭という拘束力が疎ましくなり、自助の精神から家族から離れたくなることがある。その心理がごく当たり前の感情であることを Tyler は忘れずに書き込んでいるのだ。その気持ちは、以下のように、いつまでも家から独立したがらない Daphne に向けられた Agatha の発言に垣間見ることが出来る。

> "You know," she [Agatha] told Daphne, "in many ways, living in a family is like taking a long, long trip with people you're not very well

acquainted with. At first they seem just fine, but after you've got traveled a while at close quarters they start grating on your nerves. Their most harmless habits make you want to scream — the way they overuse certain phrases or yawn out loud — and you just have to get away from them. You have to leave home." (284)

家族間の微妙な心理に対するこのような認識があるからこそ、非標準的とされる形態の家族も、心理的な側面では「普通の」家族と変わらないのだと読者を納得させることができるのである。その結果、結局、大切なのは家族の成り立ち方ではなく、どのような精神的絆がそこで結べるかなのだという作者の見解が、見えてくる。

血縁とは、良くも悪くも、それだけで最初から人と人との間を繋げてしまう要素である。ところがIanの場合は、家族のつながりにおいて一種の切り札ともなり得るその要素を頼みにはできなかった。彼は、行きがかり上、家族を形成せざるを得なかったのだ。だから彼らは、成り立ち方から言えば、"accidental family"なのである。

それでも、その後の生活の中で家族は家族愛によって深くつながっていく。AgathaがIanのことを「私たちをまとめる人」("one who keeps us together") (216) と称したように、彼らはIanを中心に寄り添いあい、まるで寄せ集めの布から一つの作品が出来るように、いわば "patchwork family"に変化していったのである。ばらばらの布切れをつなぐのがIanの役目であり、彼は、それぞれに異なる布の美しさを壊すことなく、それでいて全体として一つにまとまった家族という作品に長い年月を費やして作り上げたのである。やがて、子供たちは成長して別の布地ともつながっていき、そのパッチワークはさらなる広がり生み出すのである。

このようにTylerは、伝統的理想の家族像を一旦崩壊させ、新たな組み合わせの家族を作っている。そして、彼らの生活を通して、家族とはその構成員の努力で出来上がっていくもの、換言すれば、家族は始めから家族であるのではなく、家族になっていくものだということを示している。また、家族には愛着と反発という相反する感情がついてまわることを示し、血縁の有無にかかわらず、どの家族も同じような感情の波を経験し、同じような命のサイクルを経ながら変化してゆくことを描いている。つまり、形態としては新しく現代的な家族像でありながら、そこに流れる感情や時間が引き起こす変化に関しては、昔からの変わらない家族像を提示したのである。

2　信仰の態度

宗教的背景に関するハリス世論調査によると、アメリカ国民の95%が神の存在を信じ、そのうちの86%以上がキリスト教徒であると報告されている。[6] アメリカでは教派主義が宗教に対する基本的態度となっているために、様々なキリスト教教派が社会的に認知されている。信仰、信教の自由に基づいて、宗教においても多元主義であると言われている所以である。[7] しかし、実際にはアメリカは「プロテスタントの牙城」[8] であり、非プロテスタント宗派への偏見や非友好的姿勢が解消されたわけではない。しかも主流であるプロテスタント系の中でも、1970年代以降キリスト教右派やキリスト教原理主義者などによる教派が復活し、再び勢いを得ている。彼らは、保守的なレーガン政権のもとで伝統的な家族への回帰と道徳的な価値観の復権を唱え、ヒューマニストやリベラリストに宗教的・政治的攻撃の矛先を向けてきた。

そのような宗教的社会状況を背景にした時、Ian の信仰はどのような社会的意味合いを持つといえるだろうか。直接神と向き合い、少しでも善い人間になろうと努力する彼の姿は、数多くの人や教会が時として神の名の元に頑迷で偏狭になり、皮肉にも神の御心から一番遠いところへ離れていることに対する静かな問いかけになっているように思える。

Ian にとっての「信仰」は、「家族」と同様に彼の人生の下部構造組織となっている。彼にとって信仰は始めのうちは兄の死に対する贖罪の色合いが強かったが、それはやがて信仰を土台として善を希求する道徳的な生き方の実践へとその重心が移っていく。

信仰と道徳が不可分であることは言うまでもないが、Ian の属している教会の教義はそもそも、オーソドックスなプロテスタントの主流派とはかなり異なっていて、人間の根源的な悪を見つめることよりも人間の善性を信頼し、日常生活の中で神の教えを具体的に実践することを重視している。教会がストアフロントであることからもうかがい知れるが、Ian の教会である the Church of the Second Chance は、組織的な教会制度や権威、宗教的儀式に重きを置かず、寛容、友愛、平等、質素、互助の精神、沈黙の祈り、個人の自発性を尊んでいる。[9] 喫煙、飲酒、婚前交渉などを禁じる規則があるために部分的にファンダメンタリスト的であるという印象を与えるが、実際のところ教会員全員が必ずしもそれらの規則を遵守しているわけではない。生真面目で敬虔な Emmett 牧師でさえ、やむを得ない場合には規則よりも人道的な理由を優先させてルールを破ることがあるような教会である。[10]

作品中のファンダメンタリスト的な教会としては、むしろ Eli Everjohn が属している the Holy House of the Gospel を挙げるべきであろう。その点に関して、Paul Bail もこの教会の教義を「独断的で排他的」("judgmental and exclusive") [11]であると見ている。このような80年代に多く誕生した教条主義的教会を登場させることや Agatha のようにキリスト教そのものに懐疑的意見を持つもの、Bee や Mac McClintock など Ian の教会に批判的意見を持つ者を描写することによって、信仰によって人が独善的になったり、教条主義に陥りやすいことが提示され、さまざまな角度から信仰の態度が検討されている。

批評家の中には Ron Charles のように伝統的なプロテスタント的宗教観から Ian の教会を「妙なカルト」("a quirky cult") [12] と簡単に片付ける者もいるが、Ian の信仰や教会を通して Tyler が問題にしたのは、組織や教義以前に個人が神と向き合う姿勢ではないだろうか。信仰の原点に立ち返り、常にそこから自分を照査することで、教派にかかわりなく神に近づく道は用意されているということを示そうとしたのではないだろうか。宗教的言説が氾濫する中で、沈黙のうちに日常の中で信仰を具体的に実践していく Ian の態度は、それ自体が現代の信仰の態度を問うひとつのサンプルとなっている。

3　アメリカ的価値観への問い：禁欲的な生き方

ここでは、現代アメリカ社会の特徴のうち、物質的な成功への欲求が Ian の禁欲的な生き方と対照をなしている点を考察する。

高度消費文化社会である現代アメリカにおいては、個人の経済力に大きな価値を置くことは、当然の風潮である。もともとアメリカでは伝統的にプロテスタント的職業倫理観から、勤勉さが富へつながることは神意を達成した証として誇るべきことであった。しかし時代と共に、単に経済的な成功が人間の幸福であり、人生において最も価値のあることだとみなす傾向が支配的になった。特に80年代のアメリカは、金がアメリカの新しい宗教であると言われたほどマネーゲームに人々が狂奔した時代である。

ところが Ian は、多くの人が強力に自己主張をして社会的な成功を競い合っている中で、全く物欲や出世欲とは無縁の生き方を通している。彼は家族と木を愛し、「金をたいして持ったこともなければ、金銭欲もなく」("Ian, who had never had much money or much love of money, either....") (245)、家具職人として自己完結した世界で質素な生を営んでいる。Bee が他界した後、家財道具や家の整理のために雇われた Rita は、第３者とし

ての目を Ian に向けて、彼の本質を次のように指摘する。

> "Daphne," Rita said, "you get to know folks when you rearrange their belongings. Ian's belongings are so simple. They're so plain. He owns six books on how to be a better person...." (297)

Ian の関心は物を所有することにはなく、もっぱら「より善い人間」になるという内面的な問題にある。Tyler 自身が述べたように、この物語は「実際、善良さについての物語、善き人間になりたいという人の心の奥深くに根付いている願望とその願いが直面しなければならない自己の内側や外側に存在する因習や人間のエゴといった障害」("...is really about goodness, about our deep-seated wish to be good and the obstacles within and without [conventions, other people's egos] that this has to meet") [13] を扱った作品なのである。彼は俗世で平凡な生活を送りながらも、精神的には常に自己の内面と向き合うことで、近代以降の人間が神と引き換えに手にした怪物であるエゴや物質的な欲望から自由であろうとする。80年代的な価値観から見れば、競争社会の落伍者、あるいはせいぜい贔屓目に見ても良心的競争拒否者とでもいったところだろうか。

しかし、彼は自身の良心の声に耳を傾けてその生き方を選択したのである。なかばオブセッションとも思えるほど人を傷つけないように心を砕き、誠実で謙虚に生きてきたのである。このような人間がやがて心の平安を手にする姿は、アメリカン・ドリームが物質的成功しか意味しない今、その夢の空しさの代替価値観とみなすことができる。Ian は社会的な成功者を羨みもしなければ、逆に自分を隠遁的な賢者だとも考えていない。彼は時には神意に疑問を抱いたり失望を味わったりしながらも、神が意図したと思われる家庭における自分の責任を淡々と果している。Ian は、いわば、そこに「在りて在る人」なのだ。このような生き方は、経済力だけが幸せの指標となりがちな社会に対して、別の価値観の存在を示していると考えられる。

4　ジェンダー・ロール

Dinner at the Homesick Restaurant (1982) の Ezra Tull と同様に、Ian も家庭において男性でありながら「母親」の役割を担っている。しかし、Ezra に養育すべき子供たちがいなかったのに対し、Ian は両親と子供たちの "care taker" であり、また一家の稼ぎ手でもある。彼が果す役割の新しさは、

古いジェンダー観を持つ父親のDougや「妻は専業主婦に限る」("No working wife for Danny")(11)と考える長男と比較するとわかりやすい。

> "He [Ian] looks downright domestic, in fact," his father said, and he gave a snort of laughter. Doug belonged to an era when the sight of a man holding a baby was considered humorous...but now Ian wondered why. He felt irked to see his father drift behind Bee toward the stairs, although *his* knees were not arthritic and he might easily have stayed to help. (95)

伝統的な役割分担を当然のこととして過ごしてきた父親には積極的に育児や家事に参加するという発想はない。それに対して、実際に子供の世話をやり始めたIanは父の態度に疑問と苛立ちを覚えている。Paul Bailは、その点を次のように指摘している。

> "Unlike his father, he [Ian] can mop the kitchen floor and can change a baby's diaper without vomiting, and he doesn't find his masculinity threatened by rocking the infant Daphne to sleep. [14]

つまり、Ianは「男らしさ」の神話から自由な人間として描かれていると言える。子供たちが、細やかな愛情溢れる世話を必要とする場合でも、あるいは彼を頼りにして庇護を求める場合でも、Ianは其々に応じようと努めるのである。

しかしながら、ここで見落としてならないのは、Ianが家庭で果している役割がジェンダー・ロールの問題と深くかかわる事例でありながら、そこにはTylerの政治的思惑が入っていないということである。Linda Wagner-Martinも次のように指摘している。

> Tyler suggests that it is the trait of lovingness in which she is interested, not so much women's roles and their problems of definition. For Ian Bedloe risked none of his masculinity...spending his years waiting on his children, the children that were not in any way his. [15]

つまり、彼が、伝統的に母親の領域とされたところと父親の領域とされたと

ころを必要に応じて行き来できるのは、「人間」として子供たちへの愛情があるからなのである。

同様に、Doug に見られるような伝統的な父親像の扱いに関しても注意しなければならない。Tyler は Doug を家父長的存在として糾弾しているわけではないからである。退職後、彼にも家事を手伝う気持ちがないわけではないが、今までの蓄積がないために思うように手伝いができず、結局、愛犬と散歩をするか、留学生の家に行くか、家事の中でも「男の領分」である道具の修理をするぐらいが関の山なのである。Tyler は、ステレオティピカルな役割分担の結果を提示しただけである。そして、「だだし、それについて読者が考えるのは自由です」というスタンスを取っている。

結局、Tyler はジェンダーに関してフェミニスト的に社会問題の提起をするのではなく、固定観念に縛られることなく愛情や責任感を土台にすれば、だれにでも母親の役割も父親の役割もできるということを Ian に体現させているのである。その意味では、Gloria Steinem が「女にやれることは男にもやれる」と言ってのけたことを政治的文脈の中にではなく、生き方の選択という個人の自由意志の問題として、アメリカの個人主義の文脈の中に書き直しているのだ。

Ian が子育ての過程で繰り返し述べていることは、その単調さと退屈さである。育児を通して得られる喜びは彼にとって何ものにも換えがたいが、育児そのものは忍耐なくして達成できない仕事であると実感している。その経験を通して、Ian は今まで気づかなかった「耐えること」の美徳を認識するようになる。彼は母の姿を振り返り次のように思う。

> Lately he'd started valuing such qualities. He had begun to see the importance of manners and gracious gestures; he thought now that his mother's staunch sprightliness had been braver than he had appreciated in his youth. (Last summer, laid up for a week with a wrenched back, he had suddenly wondered how Bee had endured the chronic pain of her arthritis all those years. He suspected that had taken a good deal more strength than the brief, flashy acts of valor you see in the movies.) (323)

ジェンダー・ロールにおいて従来は女性の特性として押し付けられてきた「耐えること」を男性である Ian に母親の機能を果させる過程で獲得させ、

その本来の価値をここでも非政治的文脈で再発見させている。

このことは、この作品が80年代というバックラッシュの時代を背景に持ちながら、ジェンダー・ロールに関する反動的な言説の復活に対して、結果的には、ジェンダーフリーな役割分担が「個人の」レベルでは可能だということを示すことになった。

結論

Tyler は、作品に特定の政治的ヴィジョンや社会問題を意図的には持ち込まない作家である。彼女の関心は、日常の人間関係における人の気持ちの微妙なズレが生み出す複雑な絡み合いや長い時間の経過の中で人間に起こる変化にあるからだ。彼女が常に様々な形の家族を描くのは、それが人間関係を最も濃密な形で観察できる最小の社会的単位だからである。

それでも、長いスパンで日常生活を捉えようとすると、その背景となる時代やそれに付随する社会的問題はおのずと何らかの形で作品に入り込んでくる。あるいは、必要に応じて書かざるをえなくなる。その時、その扱いには、当然、作者の関心や信条や価値観が反映されることになる。

Saint Maybe において、本稿でみてきたように Tyler は社会性のある事柄をいくつか取り上げている。まず、50年代の家族神話の崩壊を描き、それまでであれば崩壊家庭とレッテルをはられそうな新しい形態の家族が、家庭として機能する姿を示している。また、信者の数だけは多いにも拘らず形骸化、あるいは先鋭化した信仰のあり方を、敢えてマイナーな教派を作り出すことで、宗教的寛容さや敬虔さという信仰の原点に立ち返らせる契機を提供している。更に、19歳で他人の子供の父親兼母親になる道を選んだ Ian を通して、血縁もジェンダーも家庭の成立において決定要素とならないことを示している。彼女は、アメリカ的競争社会の価値観とは別の価値観やジェンダー観を個人史の一部として提示しているのである。その他にも、社会的な視線という点では、ヴェトナム戦争に関する短いが示唆に富んだ言及があったり、[16] 外国人留学生を登場させてアメリカの内側に居ながらそれを外からの視点として眺める機能を果させている。

Saint Maybe の中に表された Tyler の社会性は、すべて、日常的な家庭生活を通し、愛することや耐えることによって、平凡でありながら同時にそれぞれの形で非凡さを発揮している人たちへの興味から生まれた、いわば副次的な視線の産物なのである。自己の政治的・社会的主張を積極的に表明するための描写ではなく、描写したいものを表現するために入ってきた要素なの

である。

しかし、それにもかかわらず、Tyler の因習や偏見に囚われない発想や人間の行いを裁断しない寛容さが、見落とされがちな周縁的なものへの再認識と新たな評価を促すのである。それは、真正面からの主張にあるような強さは持たないものの、かえって、問題の核心に触れる思わぬ力を発揮しているのである。

註

1．Tyler は、6 作目の長編、*Searching for Caleb*（1975）によって John Updike に高く評価され、以後、新作を発表するたびに大きな注目を集めるようになった。*Dinner at the Homesick Restaurant*（1982）で Pen/Faulkner Award を、*The Accidental Tourist*（1985）で National Book Critics Circle Award を、*Breathing Lessons*（1988）で Pulitzer Prize for Fiction を受賞している。また、1994年 3 月13日発行の *The Sunday Times* で、現役の批評家と作家にアンケート調査を行い、"The Order of Merit" — Who is the greatest living novelist writing in English?" なる特集を組んだところ、Tyler は、1 位の Saul Bellow 2 位の John Updike，3位の Muriel Spark，4位の Anthony Powell と Philip Roth に次いで選ばれている。

2．本稿ではテキストとして、Anne Tyler, *Saint Maybe*（London:Chatto & Windus, 1991）を使用する。以後テキストからの引用はこの版により、カッコ内にページ数のみを記す。また、註では必要に応じて、本テキストを *SM* という省略表記で表す。

3．Stephanie Coontz が *The Way We Never Were : American Families and the Nostalgia Trap*（NY：Basic Books, 1992）で論証したようにアメリカの伝統的家族像は、50年代に白人中産階級の価値観を軸にした社会的、経済的、政治的な秩序の形成過程の中で作られたものである。それ故に、50年代以前には存在しなかった特異な家族形態に過ぎない。それにもかかわらず、このイメージはメディアを介して一般大衆に植えつけられ、保守勢力によって繰り返し政治的に利用されている。

4．猿谷要編、『アメリカの社会—変貌する巨人』（東京：弘文堂、1998）146参照。

5．Cf. Gary W. McDonogh, Robert Gregg, and Cindy H. Wong ed.,

Encyclopedia of Contemporary American Culture (NY : Routledge, 2001) 257.

6. ハロラン芙美子、『アメリカ精神の源—「神のもとにあるこの国」』(東京：中公新書、2000) 7－9参照。
7. 日本アメリカ文学・文化研究所、『アメリカ文化ガイド』(東京：荒地出版社、2000) 47及び、井門富士夫編、『アメリカの宗教－多民族社会の世界観』(東京：弘文堂、1993) 10参照。
8. 越智道雄、『21世紀のアメリカ文明—文化戦争と高度管理社会』(東京：明石書店、2002) 146.
9. これらの特徴は、概してクウェイカーの教義と大きく重なっている。この点に関してはTylerのバックグラウンドが影響していると言っても差し支えないであろう。Tylerの両親はクウェイカー教徒のアクティビストで、彼女は子供時代の数年間をクウェイカーの理想主義的コミューンで過ごしている。Joseph C. Voelkerが指摘するように、Tylerの大きな特徴のひとつである「寛容さ」と「人間の善性の確信」は、the Church of the Second Chanceの教会員の信仰に反映されている。See Joseph C. Voelker, *Art and the Accidental in Anne Tyler* (Columbia : University of Missouri Press, 1989) 3－4.
10. See *SM*, 302－03.
11. Paul Bail, *Anne Tyler : A Critical Companion* (Westport : Greenwood Press, 1998) 166.
12. Ron Charles, "Story of Faith Avoids Cynicism and Saccharin," *Christian Science Monitor*, 18 March 1999 : 19.
13. Paul Binding, "Saints and Angels," *Independent* (London), 21 June 1998 : 27.
14. Bail, 170.
15. Linda Wagner-Martin, "Breathing Lessons : A Domestic Success Story," *Anne Tyler as Novelist*, ed. Dale Salwac (Iowa City : University of Iowa Press, 1994) 170.
16. See *SM*, 45, 117－8, and 173.